

SO<sub>2</sub>を飽和しても、Luciferine は沈澱しないと云つてゐる。この鹽出實驗の不成功は、確かに HARVEY の實驗の矛盾を證明することは已に指摘した通りだ。私は序に HARVEY の實驗を繰返してみた。所が HARVEY の實驗は全く間違で、彼の方法を用ゐても、Luciferine は粉の (NH<sub>4</sub>)<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> の飽和で全く沈澱する。これは勿論 HARVEY 自身の他の結果からみても、沈澱するのが當然で少しも怪しむに足らない。寧ろ HARVEY がこの重大な矛盾を見逃してゐるのは分らない。

それに又前項に述べた私の新しい方法は、HARVEY の溶出法よりも遙かに優秀だ。更に無水プロピルアルコールを用ゐて、私の方法を改良することが出来るかも知れないと思ふ。

#### 四

私は海螢 Luciferase の凝固する温度について、攝氏六

十七度としたこともあるし又、攝氏六十五度としたこともある。所が沸騰點攝氏七十八度の無水エチルアルコールを一時間拂騰して Luciferine を溶出した後、尙幾分かの Luciferase が無事に残存してゐることを觀察した。それから又熱湯(攝氏百度)の中で Luciferine を溶出した後でも、尙幾分かの Luciferase が無事に残存してゐる場合も觀察したことがある。これ等の事實を綜合してみると、Luciferase の凝固する温度については、尙十分に研究すべき點があると思ふ。

それから又無水メチルアルコールの中で、七八十時間 Luciferine を溶出した後、それを水風呂の上で蒸發すると、蒸發皿の上部に一種の結晶が出来る。この結晶は無水メチルアルコールには良く溶けないが、水には良く溶ける。しかしこの結晶は Luciferine には關係ないものらしい。(大正一一・二六)

## 丸毛氏の論文并に新種の天社蛾科に就て

(大正十一年二月二日受領)

理學博士 農學博士 松村松年

大正九年十二月東京帝國大學農學部紀要に發表せられたる—A Revision of the Notodontidae of Japan, Corea and

Fornosa with Descriptions of 5 New Genera and 5 New Species.—天社蛾科の論文を購讀するを得たり。大學の

紀要論文としては餘り物足らぬ氣がすれば今少しく之れを批評すべし。

此論文の題目は日本、朝鮮及び臺灣のレピジョンと云ふ大なる題目であるが之れには僅百十五種を擧げたに過

ぎない。其内に約七十六種程の標本が研究せられある様に見える。又殊に朝鮮や臺灣の種類が甚だ少いのは遺憾である。

既に余の友人 EMBRIK STRAN. (Notodontiden Gattungen, Entomologische Zeitschrift 1911-12) が天蛾科の研究をなし其困難なるを述べし如く此科の研究は少數の標本では到底充分なる研究の出来るべきものでない。此論文は頁数は八十七頁より成り之れに十八枚の圖版を附し其内に二枚の着色石版圖を添へ之れに六十種の蛾を寫生せり。又、之れに五箇の新屬及び五箇の新種を記載して居る。其の内新屬は左の如し。

1. *Microplitis* MATSUMOTO (= *Sharitha* MATSUMOTO)
2. *Yazawaia* MAR. (= *Epinotodonta* MARS.)
3. *Brachionycoides* MAR. (= *Shiaka* MARS.)
4. *Egonocia* MAR. (= *Quadricalcarifera* STRAN.)
5. *Densitas* MAR. (= *Epyzomyza* MARS.)

此内の四屬は余の既に動物學雜誌(第三十二卷第三百七十九號)にて發表せるものにしてシノニムなり。

又 *Egonocia* の一屬は *Quadricalcarifera* STRAN. (Arch. f. Naturg. p. 160, 1915) のシノニムなり。尙丸毛氏は *Egonocia* 屬に *fasciata* MOOR. をも編入せり。余は *fasciata* MOOR. に既に本誌三十二卷にて *Neophensia* の新屬を設立し置きたり。

又同氏の新種は左の如し。

1. *Yazawaia japonica* MAR. (= *Epinotodonta fumosa* MARS.)  
(此シノニムなる事は同氏のゲストスクリップトにあり)

2. *Hyperaesthra kururana* MAR. (= *Allodontoides discoloris* MARS.)
3. *Hyodontia obsoluta* MAR. (= *H. liqvia* MARS.)  
(此シノニムなる事も亦同氏のゲストスクリップトにあり)

4. *Egonocia formosana* MAR. (= *Quadricalcarifera horishana* MARS.)
5. *Egonocia nachletensis* MAR. (= *Quadricalcarifera oyana* TIEBER.)

此内第五には變化多く、余は二十數頭の標本を所有するが個體に何れも多少の變化あり、殊に *Q. perdia* MOOR. の如きは一層の變化をなすものなり。尙同氏の誤つて同定せる種類は左の如し。

(1) *Phalera assimilis* BREM. et GREY — 此種の果して日本に産するや否やは問題なり、故に曩にリーチ氏が兩度の目錄を作成する時にも此種類を本邦産として擧げ居らず。スタウデンガー氏が一千九百一年に發表したる目錄に初めて *fuscescens* BUTL. をアシミリスのシノニムとして擧げたり。然かも猶ほ Jap. (var. ?) と記入せり。其後一千九百十二年グルンベルグ氏は疑問なしにフセセンスをアシミリスのシノニムとせり。

更に其後一千九百十五年故長野菊次郎氏は幼蟲の異なる所より兩種の全く異なる事を證明せり、然れど何れが果してアシミリスなりやフセセンスなりやは大に疑問なりき。余昨年幸に英國博物館に到りタイプを實見し長野氏の *assimilis* とせるものは誤りにして *fuscescens* なる事を確めたり、即ちフセセンスの前翅翹端に存する黄紋は三角形を呈し翅の長さ大なるものは(♀)三七ミ、メあり、而して同氏及び丸毛氏の *fuscescens* とせるものは余の *angustigenis* なるを知るに到れり。余は朝鮮水

原産のアシミスと思はるる二頭の標本を有す、果して同種なるやを知るを得ず。蓋しブレム及びグレイ氏の原記載は餘り簡にして之れによりて種を同定するは困難なればなり。本邦に産する *Phalera* 屬に掛るものは先づ左の九種なり。

- |                 |                                    |       |
|-----------------|------------------------------------|-------|
| 1. ツマキミヤチホロ     | <i>Phalera fuscescens</i> BURR.    | 東京、岐阜 |
| 2. ホソツマキミヤチホロ   | " <i>angustipennis</i> MANS.       | 東京    |
| 3. タカサコツマキミヤチホロ | " <i>takasugensis</i> MANS.        | 東京、播州 |
| 4. エビツマキミヤチホロ   | " <i>jezoensis</i> MANS.           | 札幌、京都 |
| 5. コツマキミヤチホロ    | " <i>minor</i> NAG.                | 東京、岐阜 |
| 6. テウセンツマキミヤチホロ | " ? <i>assinitis</i> BREM. et GREY | 朝鮮    |
| 7. ツマトビミヤチホロ    | " <i>senyuan</i> MOOR.             | 朝鮮    |
| 8. (未だ同定せず)     | " <i>obscura</i> WILHEM.           | 臺灣    |
| 9. 同            | " <i>flaevicincta</i> WILHEM.      | 臺灣    |

尙丸毛氏は二百八十五頁に於て *Anthepepe combusta* WK. をも *Phalera* 屬に隸せしめたり。然れど之れは大なる誤りなり。蓋し此屬にありては雄は長き兩櫛齒狀の觸角を有し一目判然せる特徴を有すればなり。尤もハンブソン氏は Fauna of British India, Moths I, p. 145, t. 87 に  $\sigma$  とすべきに  $\sigma$  となし居る爲め同氏は之れを眞實雄なりと思ひたるが如し。

- (14)? *Spatulia plusiotis* MAR. (l.c. p. 290) ♀ *Spatulia jezoensis* WILHEM. なり。
- (27) *Urodonta viridimixta* MAR. (l.c. p. 298) は *Urodonta hirajunae* MANS. なり。
- (62) *Notodonta dembowskii* MAR. (l.c. p. 320) ♀ N.

*stigmatica* GRÜNER. なり。初めて日本に *dembowskii* OBERHE. の産する事の記載はワイルマン氏の一千九百十一年 Trans. Ent. Soc. Lond. p. 291 に發表せられたるを以て嚙矢とす。其後グルンベルグ氏はザイツの大蛾編に之れを引用し、其後一千九百十六年に至りワイルマン氏は己れが *dembowskii* OBERHE. と同定せしものは誤にして實は *rotschildi* WILHEM. なる事を Entom. p. 133 (1916) に記載せり。今日まで余の知る所では *dembowskii* OBERHE. は日本に産せず。然して氏のデンボースキーと稱するものはスチグマチカなり。

(63) *Notodonta stigmatica* MAR. (l.c. p. 321) ♀ N. *rotschildi* WILHEM. なり。一圖版第二十二圖によりて見るに之れは明瞭にスチグマチカにあらずしてロスチャイルディなり。

(74) *Lophodonta graeseri* MAR. (l.c. p. 327) は *Mesodonta isridae* MANS. なり。一元來グレセリーの日本に産するの記事は一千九百十一年初めてワイルマン氏によりて發表せられたり。然れど此グレセリーが果して日本に産するや否やは疑問なり。蓋し英國博物館には此標本なし。唯だロスチャイルド氏の博物館に二頭の雄を有し之れに *Notodonta arnoldi* OBERHE. (Etid. Léop. Comp. 5 (1), p. 322 (1911)) の學名を附したり。而して此アルノルディは一千九百十一年に發表せられたるものにして余は之れを *Notodonta isridae* (Thous. Ins. Jap. Suppl. p. 56, Pl. X, t. 1, 1909) として既に一千九百九年に發表せるものなれ

ば無論ブリオーテートなり。

又氏の使用せる *Lophodonta* 属は米國固有のものにして之れは雌雄共絲狀の觸角を有するを以て有名なり。雌雄絲狀の觸角を有するものは未だ日本に發見せられず。

(99) *Phliophora plumigera* MAR. (= *Phliophoroides nobire* MATS.) 此標本をプルミゲラとして發表したるものはリーチ氏 (LEECH—Proc. Zool. Soc. Lond. p. 638 (1888)) なり。其後スタウデンガー氏もザイツ氏も之れを引用したり。余も亦之れを昆蟲總目錄に引用したり。然れど其後の研究によりて全く別種なるのみならず別屬なるを知るに到り、之れは既に本誌に發表し置きたり。

尙同氏は其論文の劈頭に *Platychasma virgo* BUTR. を天社蛾科より夜蛾科に移せるが氏は此標本を有しての結果なるや若し標本なしに之れを夜蛾科に移せるものとせば頗る不謹慎と曰はざるべからず。余は英國の博物館にて三頭、ロスチャイルド氏の博物館にて二頭の雄を實見したり、頗る稀なるものと見へ余は未だ此標本を捕獲せず、一見 *Apela divisa* WK. に似たり、又同氏は *Stratoban jankowskii* と *Gelastocera exusta* の兩種を夜蛾科に移すべきものとせり。然れど之れは氏の發見に非ずして既に二十年(千九百一年)前にスタウデンガー氏は之れを實蛾科 (*Gynbidae*) に屬せしめ余も亦十六年前之れを引用して發表したり。而して其後ハンブソン氏は實蛾科を夜蛾科に合同せしめ、ワーレン氏も亦之れを引用して十年前既にザイツの大蛾編に發表して居る。

尙氏は米國固有の *Macrorocampa* (DYAR) 属に日本産の五種の天社蛾を編入せしめたり。即ち左の如し。

1. *Macrorocampa signata* MAR. = *Neophalera signata* BUTR.
2. " *delia* MAR. = *Neodrymonia delia* LEECH.
3. " *niphonica* MAR. = *Eufentonia niphonica* WITTM.
4. " *variegata* MAR. = *Disparia variegata* WITTM.
5. " *nigrofasciata* WITTM. = *Fentonia nigrofasciata* WITTM.

余は此内初めの四種を所有するが最後の(5)は未だ捕獲せず。氏は此れを *Macrorocampa* に編入せる以上は定めし所有するものなるべし。多くは圖版を擧げあるに係はらず此内の(3)と(5)には何等の記載なきは甚だ遺憾なり。DYAR の *Entomological News* IV. p. 34 (1893) に掲げた *Macrorocampa* 属の記載を見るに丸毛氏の今回與へたる説明と大に異なるを見る。即ちマクルロカンパ属の丸毛氏の記載と異なる重要な特徴は觸角は櫛齒狀なれども末端に達せず、前翅の第五脈は横脈の中央以上より起り、第十脈は第七脈の前方より出づ、後翅の第三及び第四脈は一點より起れるにあり。同氏のマクルロカンパ属に編入せる蛾にして後翅第三及び第四脈の一點より出づるものは *signata* の一種あるのみ。然れど之れは雌雄共に鋸齒狀の觸角を有するを以て容易に本属を分別し得べし。

尙余が最近新日本千蟲圖解第四卷に發表して以來新に發見せる六新種二新變種三新屬及び日本に未だ知られざる四種の天社蛾あれば此機會を利用して發表すべし。

## 一、オホネグロシヤチホコ

*Eufrentonia nipponica* (WILLEM.)

之れは初めワイルマン氏により *Frentonia* 屬として發表せられたるが其後クルンベルグ氏は *Drymonia ermita* (Günth.) としてザイツ大蠅編に發表せり。丸毛氏は *Macropocampa* 屬に隸せしめしことは前述の如し。余は最近新千蟲圖解第四卷に *Disparia* 屬を用ひたり、然るに今親しく之れを研究せる結果何れも之れを隸せしむべき屬にあらずして新屬なるを知るに至りたれば今爰に其特徴を記すべし。

*Fufrentonia* *Matsumura*, n. g. — *Frentonia* *Burm.* に似たれども其異なる所は左の如し。

觸角は長き櫛齒狀を呈し、末端の約十二節は鋸齒狀を呈す(雌にては絲狀にしてフエントニア屬の觸角に異ならず)、前翅は廣く、フエントニア屬の如く小室を有せず(ハンブソン氏印度蠅類には小室を欠くと記せども其タイプは *Oxyptera* *Burm.* には明瞭なる長き小室を有す)、後翅は廣く、第三及び第四脈は相近接す、雄の腹部は圓柱形にしてフエントニア屬の如く圓錐形を呈せず、此屬のタイプは *Frentonia nipponica* *Wilm.* = *Drymonia ermita* *Günth.* なり。

## 二、テウセンシモフリシヤチホコ

*Quadrivittularifera coreana* *Matsumura* n. sp.

♀、前翅は灰白、暗緑鱗を散在し、縦脈は暗緑なり。中室の中央に白色の長楕圓紋ありて其周圍暗緑、尙其直下にも同様の一紋ありて之れは中脈に相接す、中央は暗緑、之れに灰白波狀の中横線及び後横線を横走し、之れは稍々外縁に平行す、亞外縁線は黒色にして細く、第二及び第三脈の處にて犬牙狀をなして外方に突出し、前縁の外半は暗緑にして之れに黄白の點紋を列ぬ、縁毛は暗色、脈の終止する處に黄白の點紋を有す、後翅は灰褐、前縁に二暗色紋を具へ外側紋よりは判然せざる一帯を内縁に向つて横走す、翅端は灰白、外縁線は暗色、縁毛は灰白、之れに少しく黒毛を混す、裏面は前翅暗色、縁毛は少しく濃色にして脈の終止する處に黄白紋を有する事表翅の如し、後翅は灰白、觸角は白色、櫛齒は淡黄褐、鬚は黄褐、下面は灰白、

頭及び頸は灰白、顔の下方は黒色、胸背は灰白なれども黒毛を混す、腹部は灰黄、尾端に黒毛を混じ、第一節には暗色の毛塊を具ふ、開張五五・三・メ、體長二〇・三・メ、之れは七月五日朝鮮水原にて岡本博士の捕獲せるものなるが稀なるが如し、余は一頭の雌の送附を受けたり、之れは *quadrivittularifera* *Mats.* (淺間山産)の雌に酷似せり、然れど前者の翅は幅廣く亞外縁線の第二及び第三脈の犬牙狀をなせるに反し後者は全脈の處にて犬牙狀をなせり。

## 三、アラモンシヤチホコ

*Quadrivittularifera aridimacula* *Matsumura* n. sp.

♀、前翅は白色、黒鱗を散在す、翅端、後縁及び前縁の外半にある大紋は暗緑、横線は判然せざれども翅底線、前横線、後横線は黒色にして唯だ縁毛上に於て判然し、前縁の暗緑線上にある外横線は波狀をなし、殊に第七脈上にあるものは犬牙狀をなす、亞外縁線は細く黒色、波狀を呈す、外縁線及び縁毛は暗色、脈の終點に灰白毛を列ぬ、後翅は暗灰色、前縁は白色外縁に近く暗色の一紋ありて之れより内縁に向つて判然せざる一帯を横走す、外縁線は暗色、縁毛は灰色、暗色毛を混す、裏面、前翅は暗色、縁毛は濃色、之れに黄白紋を列ぬ、後翅は灰色、外縁線は暗色、觸角の櫛齒は他の同屬種のものよりも長し、鬚は淡褐、下面は灰白、頭及び頸は白色、顔の兩側及び下方は淡褐、胸背及び腹部は灰褐、腹部は他の同屬種より比較的長し、開張六六・六・メ、體長二七・三・メ、之れは余の採集家の一昨年七月臺灣埔里社にて採集せるものなるが余は唯だ一頭の雌を所有す、珍種なり、一見斑紋の具合より見れば *Dumetia* 屬に隸するものと如し。

## 四、テウセンネジロシヤチホコ

*Quadrivittularifera coreana* *Matsumura* n. sp.

♀、前翅は暗灰色、翅底は白色、之れに黒點を具へ、翅底線は黒色、其中央より中脈に平行せる一黒線を外方に送り、更に其外側に一雙の黒前横線ありて、之れは第一脈の處にて「く」字形を呈し其間至は白色なり、横脈紋は黒色にして判然し、其外方に楕圓形の灰白紋ありて其限界は餘り判然せず、外縁線は黒色波狀にして、脈の處にて遮斷せらる、縁毛は灰白、暗

色毛を混ず、後翅は灰色、前縁及び外縁は少しく暗色を帯ぶ、外縁線は暗色波状にして縁毛は灰白、裏面、前翅は暗色、後翅は灰白、中央に暗色帯を具へ、之れより内部の前縁は暗色を呈す、頭胸は灰白、之れに少しく黒毛を混じ、殊に肩板毛の末端は黒色、腹部及び下面は灰白、前肢及び前胸面に暗色毛を具ふ、開張三十四ミメ、體長一六ミメ、一頭の雌を朝鮮水原にて捕獲せり、珍種なるが如し。

#### 五、タイワンホンバシヤチホコ

*Fentonia crenulata* MATSUMURA n. sp.

之れは *F. occipeta* Wlk. に酷似すれども其異なる所は左の如し。

♂、前翅の基部三分の一は暗色、前横線は細く暗色にして翅端の暗色部との間室は灰白、其外側の一圓は灰白、横脈上の灰黄紋は大、後横線の外側は白色を呈し、之れより外側の縦脈はナシペーテの如く黒色を呈せず、外縁線は黒色にして波状を呈し、各室の處にて少しく刻らる、縁毛は灰白、脈の終點に黒毛あり、後翅は灰白、内縁角及び各脈の終點に黒毛あり。

裏面、前翅中央にある淡色帯はナシペーテよりも遙に廣く且つ判然し、縁毛は灰色、脈の終止する所に黒毛を有す、後翅は脈共に白色、脈の終點に暗色毛あり、頭胸及び腹部は一層淡色にして腹部は長し、開張五十一ミメ、體長二十三ミメ、之れは高橋悌吉氏の臺灣埔里社にて捕獲せるものなるが余は一頭の雄の送附を受けたり。

#### 六、シロテンシヤチホコ變種

*Urodonta viridimaculata* Brauer. *infusata* MATSUMURA n. var.

MURA n. var.

原種と異なる所は前翅は暗色にして中脈の下方にある第一室の白紋を欠き、横脈外の白紋は小、前横線は黒色にして一雙よく來り第一脈に達す、中横線の外側に太き黒帯ありて、之れは後縁にて廣まる、白色なる亞外縁線の前縁に近きものは原種の如く高き犬牙状を呈せず、縁毛は暗色、後翅は暗色、縁毛灰黄、裏面、前翅は暗色、亞外縁線は灰黄、後翅は黄白、中央帯は暗色にして内縁に達す、夫れより前縁の内側も暗色、腹部は暗色、

之れは大正十年九月一日札幌にて捕獲せるものなり、或は別種とすべきものなるやも知れず。

#### 七、シマシヤチホコ

*Epodonta lineata* OBERTH.

是れは従來 *Drymonia* 屬に隸せしめありたる所、全く新屬なれば爰に記載すべし。

*Epodonta* MATSUMURA n. g. — *Drymonia* 屬と異なる所は左の如し。

(♂)(♀)共に同様の櫛齒狀の觸角を具へ櫛齒は末端に到るに隨ひ次第に短小し終りの約九節は鋸齒狀を呈す、ドリモニア屬にては雌は絲狀を呈し雄にては末端迄櫛齒狀を呈す、複眼には(♀)(♂)細毛を生ず、鬚は短くして頭頂に達せず、此屬のタイプは *Drymonia lineata* OBERTH. なり。

#### 八、テウセンフタジマシヤチホコ

*Neodrymonia coreana* MATSUMURA n. sp.

*N. alba* Leac. に酷似すれども其異なる所は左の如し。

前翅は灰色にして少しく紫色を帯び、翅底にY字形の黒紋を具へ、之れは雌にては短かし、其直上に黒線ありて之れは翅底の前縁より斜走して前横線に達す、後横線は弓形をなし第二脈の所にて少しく内方に曲る、外縁線は波状を呈すれどもテリアの如く高き波状を呈せず、裏面にはテリアの如き暗色帯を缺く、頭の後縁及び肩板の一縦條は黒色、開張(♂)四十三ミメ、(♀)四十四ミメ、此雌は朝鮮釋王子にて八月十日長谷川氏により、雌は水原にて九月五日岡本博士により捕獲せられたり。

#### 九、テウセンシヤチホコ

*Mesodonta coreana* MATSUMURA n. sp.

*M. luteipes* Wlmer. に似れども其異なる所は左の如し。

前翅にはラチピツタの如く赤褐を呈するの部分を欠き、翅底の三分の一は暗色を呈し中脈下の翅底は少しく淡黄褐、其外側に弓状の一黒線ありて之れは第一室の褶線上を走りて前横線の突出部の頂角に達す、其内方には之れと平行せる短き暗色線あり、横脈紋は黒色、灰白環を有す、外縁線は

灰白なれども餘り判然せず、ラチピツタにては赤褐を呈す、開張五十四ミ  
メ、體長二十三ミメ、之れは四月三十日朝鮮水原にて岡本博士の採集せる  
ものなり、余は一頭の雄を所有す。

一〇、ウスグロシヤチホコ變種

*Epinotodonta fumosa* MATSUMURA, *shibuyae* MATS.

n. var.

原種と異なる所は左の如し。

前翅の基部に黄褐色を缺き、後横線の犬牙状突起は底く、其外側に褐色  
部を缺く、頭は頭と同色にして原種の如く灰白を呈せず、之れは當教室助  
手澁谷甚七氏の樺太大泊にて採集せるものにして余は三頭の雄を藏す。

一一、ナカボシネグロシヤチホコ

*Allodontoides discoidalis* (MATS.).

之れは *Hippocastrea* に屬するものとして發表したれども寧ろ *Alloulouia*  
に近きものにして新屬とすべきものなれば今其特徴を記載すべし。

*Alloulouia* (Srae.) と異なる所は前翅は細長にして第十脈と第六脈は合し  
て小室を構成し、第六脈は中室の前角より出で、後翅の第六及び第七脈は  
短柄を有するにあり、又 *Hippocastrea* Wk. (= *Semilouia* Srae.) と異なる

アチマツムシ *Madasumma* (*Calyptrorhynchus*) *hibinonis* MATS. の飼育

(大正十一年二月六日受領)

本篇は飯島博士記念號に於て記述したる「直翅類の体食状態に就いて」  
の参考論文として掲載したものである。彼は参照せられん事を希望する。

余は大正五年以來アチマツムシに就いて多少の注意を  
拂ひ毎年飼育して其の生態的方面を観察して居るが、今

所は觸角、櫛齒の稍々半以上に達すれどもヒメレンユラ屬にありては稍末  
端に達し、第六脈は小室の中央より出づ、此屬のタイプ *Hippocastrea discoid-*  
*alis* MATS. [Zool. Mag. Tokyo, Vol. XXXII, p. 148 (1920)] なり。

尙此他從來日本領土産として知れざりしものは左の四  
種なり。

一、ツレトビミヤチホコ *Phaleria sanguina* MOOR. 朝鮮

二、テウセンツマアカシヤチホコ *Mallophya pigra* HURN. 朝鮮

三、ホソオビシヤチホコ *Phalerodonta bombycinus* OBERTH. 朝鮮

四、タイワンフサチシヤチホコ *Dudusa nobilis* Wk. (= *synopla* SWINEH.) 臺灣

(一)は朝鮮水原にて岡本博士の捕獲せるものなるが余は三頭の標本を所  
有す。(二)も亦水原産にして余は二頭の(♀)(♂)を藏す。(三)も同じく  
水原産の標本なるが雌の標本一頭を有するに過ぎず、定めて稀ならん。

(四)は臺灣埔里社にて採集家の採集せるものなり。余は唯一頭の雌を有  
するが伯林昆蟲博物館にてザウター氏採集の三頭の標本又英國博物館にて  
ワイルマン氏の採集せる二頭の標本を見たり。後の標本には *D. synopla*  
の SWINEH. の學名を附せども伯林のものはシノプラを其シノニムとせり。  
(完結)

岡崎常太郎

こゝには大正九年に於て試みたる一個體の幼蟲より成蟲  
となり遂に死に至るまでの繼續的觀察を述べて大方諸賢  
の高教を仰ぎたいと思ふ。

飼育を始めたのは九年五月廿三日にて當時蟲體の長さ約六ミリ、觸角の